Part 2 国東で輝く女性たち

近年、女性の生き方は多様化が進んでいます。市内においても、個性や能力を発揮し、自分らしく生き生きと活動する女性が増えています。市は、こうした「輝く女性」を応援できる社会を築きたいと考えています。

ここでは、考え方や働き方の一つのモデルケースとなる方々をご紹介します。

今回ご紹介するのは、クリエイティブな活動で輝いているお二人です。

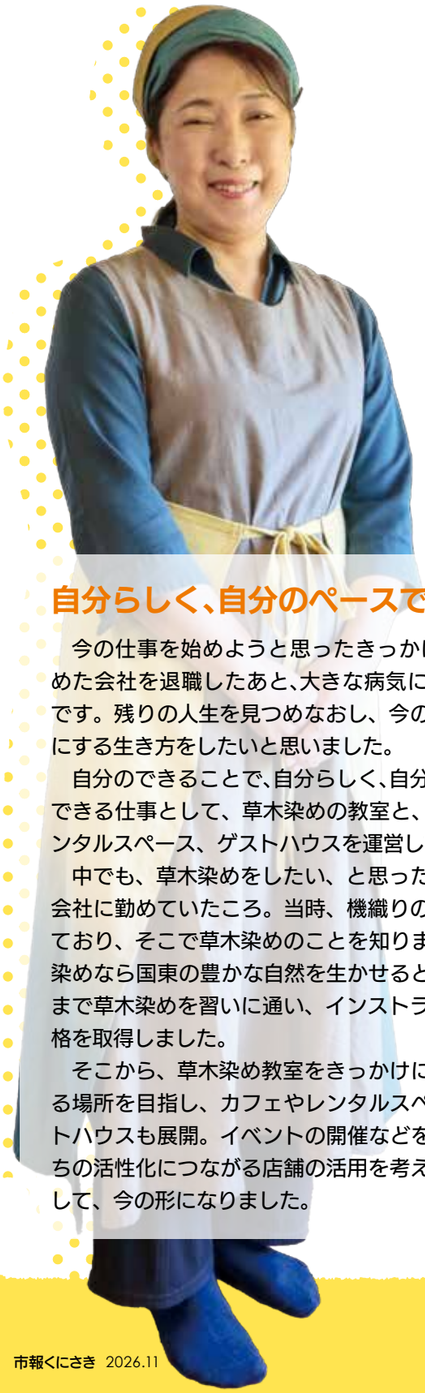
女性の活躍を応援する企業・団体

「輝く女性」を応援できる社会を作るためには、個人だけでなく、企業・団体などの力も必要です。県は、女性が活躍でき、働きやすい職場づくりを目指して取り組んでいる「**女性活躍推進宣言**」企業を募集しています。

詳しくは県のホームページをご覧ください。

市内の「女性活躍推進宣言」企業・団体
（10月27日時点）

- 苺屋
- ウーマンメイク㈱
- ㈲江本組
- 大分キヤノン㈱
- 大分航空ターミナル㈱
- ㈱来浦ぐらんま
- ㈱らいむ工房
- ㈱後藤組
- 徳丸綜合建設㈱
- 農業生産法人安部
- ㈱廣瀬建設
- ㈱別所商事
- 宮迫建設㈱



Kcompany 代表 清成 瑞穂 さん

武蔵町在住。勤めていた会社を早期退職した後、草木染クリエイターとして活動を始める。武蔵町古市で「電器屋さんのcafeじゃぁーち」を営みながら、市内外で草木染インストラクターとして活動しているほか、展示会などにも作品を出品している。



▲落ち着いた雰囲気のカフェでは、コーヒーの他、地元食材を使ったランチが楽しめます。（※要予約）



▲清成さんの作品。染料には、藍やインドアカネ、オリーブなど、さまざまな天然染料が使われています。

自分らしく、自分のペースで

今の仕事を始めようと思ったきっかけは、長年勤めた会社を退職したあと、大きな病気になったことです。残りの人生を見つめなおし、今の時間を大切にする生き方をしたいと思いました。

自分のできることで、自分らしく、自分のペースでできる仕事として、草木染めの教室と、カフェ、レンタルスペース、ゲストハウスを運営しています。

中でも、草木染めをしたい、と思ったのは、まだ会社に勤めていたころ。当時、機織りの教室に通っており、そこで草木染めのことを知りました。草木染めなら国東の豊かな自然を生かせると思い、京都まで草木染めを習いに通い、インストラクターの資格を取得しました。

そこから、草木染め教室をきっかけに、人が集まる場所を目指し、カフェやレンタルスペース、ゲストハウスも展開。イベントの開催などを通じて、まちの活性化につながる店舗の活用を考え……結果として、今の形になりました。

つながりがひろがる

やりがいを感じるのは、お店やイベントにお客様が来ていただけるときです。さらに、たまたまここを訪れた方々が自然とつながり、知り合いの輪が広がっていくのを見るのも、やりがいを感じる部分です。

同級生やかつての同僚、上司、遠方の親せきなど、この仕事を始める前からの知人たちも訪ねてきてくれて、たくさんの励ましや応援の言葉をいただきました。感謝の気持ちでいっぱいです。

たくさんの引き出しで今を楽しむ

私は50歳を過ぎて起業しました。若い時には無駄に思えた経験が、今は全て活かされています。つらい時に勉強したことで蓄えたたくさんの引き出しが、今を楽しむことに繋がっているように思います。

チャンスが来た時に飛び込める準備さえあれば、あとは波に乗るだけですよ。

丹波布技術認定者 清水 くり子 さん

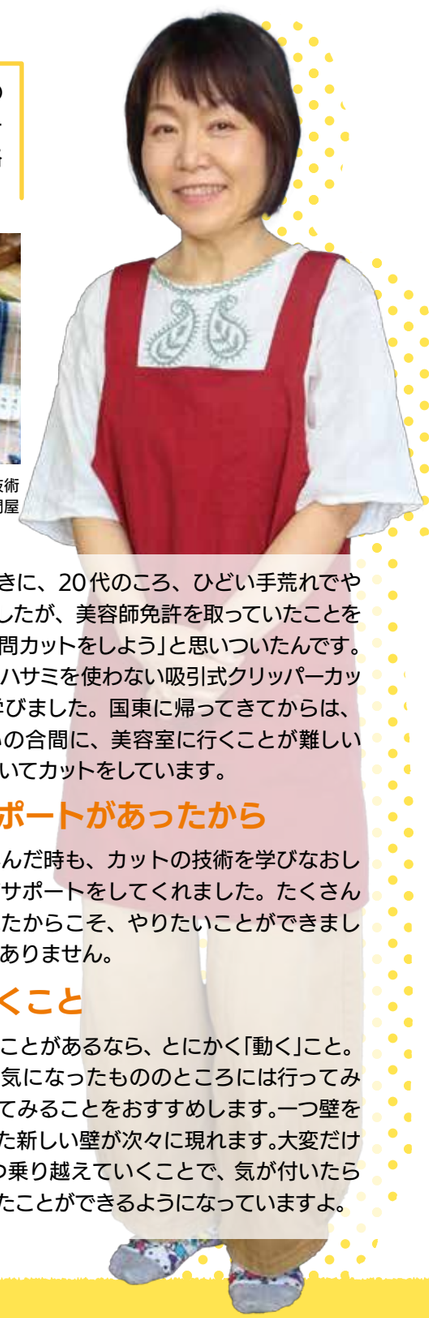
国東町在住。丹波布伝承館が実施している長期伝承教室で丹波布の技術を習得。以後、横浜に工房を構えて活動。2023年に国東市にUターンし、実家の飲食店を手伝いながら制作を継続、さらに美容師の資格を活かし高齢者の訪問カットも行っている。



▲以前は宴会場だった一室を工房にしており、お店の手伝いの傍ら制作をされています。



▲清水さんの作品。織られた反物は丹波布技術者協会を通して、東京・京都の呉服店、問屋に卸しています。



手に職をつけることが夢だった

小さいころから「手に職をつけたい」とずっと考えていました。けれど、年を重ねるにつれて、その気持ちはなくなるんだろうと思っていたんです。

ですが、自分よりも一回り以上年上の女性たちが「何かしたいから学校に行こうか、習い事に行こうか」という話をしているのを聞いてハッとしたんです。年を重ねても、「やりたい」という気持ちはなくならないんだと気づかされました。

そんなころに、たまたま丹波布に出会いました。その魅力を知り、私もこういう世界に入りたいと思って、丹波布の世界に入りました。35歳頃のことです。

少しでも地元の人の役に立ちたい

兵庫県丹波市で丹波布の工程と技術を2年間かけて学び、横浜に戻って工房を構えました。

「国東に帰る」ことを考え始めたのは、父の体調不良がきっかけでした。

帰ってから地元の人たちの役に立てることが無いかと考えたときに、20代のころ、ひどい手荒れでやめてしまいましたが、美容師免許を取っていたことを思い出し、「訪問カットをしよう」と思いついたんです。

それから、ハサミを使わない吸引式クリッパーカットの技術を学びました。国東に帰ってきてからは、制作や手伝いの合間に、美容室に行くことが難しい方の家に出向いてカットをしています。

家族のサポートがあったから

丹波布を学んだ時も、カットの技術を学びなおした時も、夫がサポートをしてくれました。たくさん協力してくれたからこそ、やりたいことができました。感謝しかありません。

まずは動くこと

挑戦したいことがあるなら、とにかく「動く」こと。ちょっとでも気になったもののところには行ってみる、話を聞いてみることをおすすめします。一つ壁を越えたら、また新しい壁が次々に現れます。大変だけれど、一つ一つ乗り越えていくことで、気が付いたら自分の目指したことができるようになっていますよ。

誰もが輝ける国東市を目指して